

指標種を用いた湿原植生に及ぼすニホンジカ影響評価手法の検討

*稲富佳洋¹・日野貴文²・島村崇志¹・長 雄一¹・吉田剛司²・宇野裕之¹

¹北海道立総合研究機構環境科学研究センター ・²酪農学園大学

湿原は、最も生物多様性の高い地域の一つと考えられており、様々な生物の生息地を提供している。近年、日本各地で急増したニホンジカが、森林植生に多大な影響を及ぼしていることが報告されているものの、湿原ではニホンジカの生息状況に関する知見が乏しい上、アクセスが困難であることが多いため、湿原植生に及ぼすニホンジカの影響を評価した事例は限られている。また、ニホンジカの管理に伴う植生に及ぼす影響の変化を評価するためには、短期間で定量的に評価できる手法を確立する必要がある。そこで本研究では、釧路湿原及びその周辺部の植生に及ぼすニホンジカの影響把握手法を検討するため、植物指標種を用いた評価手法を検討した。

調査は、2014年及び2015年8月に釧路湿原国立公園で実施した。国立公園内の植生タイプを高層湿原、低層湿原、湿性林及び広葉樹林に分類し、それぞれ3カ所、7カ所、7カ所、5カ所に調査区を設定した。各調査区を踏査し、植物指標種の候補を選択した。指標候補種を選択に当たっては、①国立公園に広く分布し、資源量が多い種であること、②対象とする種または属（以下では種と記述する）の同定が容易な種であること、③エゾシカによる食痕の判別が容易な種であること、④草丈や開花率、葉数など測定が容易な形態的特徴を有する種であること、⑤サイズが大きく、発見しやすい種であること、を考慮した。選択した指標候補種については、調査区に生育する個体の草丈、開花の有無及びニホンジカによる食痕の有無を記録した。また、異なる植生タイプ間においてもニホンジカの影響を共通に評価できるようにするため、各方形区に自動撮影カメラ（Ltl Acorn 5210A）を地上から1.5m程度の高さで樹木若しくは鉄製のポールに1台ずつ設置した。調査の結果、ミゾソバ、ヤチヤナギ、カラマツソウ属、ヤナギトラノオなどが指標の候補種として選択できた。本発表では、これらの指標候補種の生育状況と自動撮影法の結果から、指標種を用いたニホンジカの影響評価手法の有効性を検討した。